



茂睡小考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学国語国文学研究室文学史研究会 公開日: 2025-04-28 キーワード: 作成者: 西田, 正宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002002902

茂睡小考

一、はじめに―茂睡の研究史―

戸田茂睡については、江戸時代に山東京山の『茂睡考』があり、それを承けて佐佐木信綱氏の『戸田茂睡』（一九一三年九月、竹柏会）が具わり、『戸田茂睡全集』（一九一五年、国書刊行会）が刊行されている。その歌学、歌論の特徴については、佐佐木氏の著書で、詳細に述べられている。例えば、次のごとくである（表記は新字体に改めた）。

茂睡が当時にあつて数百年因襲の堂上歌学に対して、大膽な思ひ切つた攻撃を為したのは、まことにこれ元禄文明の新機運に乗じたので、この点に於いて、彼は時勢の代表者で、また先導者である。而してその堂上歌学の破壊者たる点に於いては、彼は確かに第一人たる名譽を負うべきもので有る。元禄文学史上茂睡の先輩たる長流契沖に於いて之を考ふるも、長流の如きは、前に述べた如く林葉累麈集の序に已にその意見を述べ、また古今余材抄の序に附記して、口伝秘授など言へるは愚なる事なりと言つてゐるが、

西田 正宏

単にそれだけで、其外に特に歌論といふ程のものはない。契沖に至つては、その中世歌学打破の態度、最も根本的で有つたが、主とする所は古歌の解釈語学の研究で、固より歌論では無い。即ち専門の歌論家として元禄時代の新機運を代表するものは、彼茂睡その人で有る。（中略）彼の堂上歌学に対する攻撃が言々事実に根據して毫も空論を弄するの嫌なきは、一方に彼が堂上歌学そのものに対して十分な知識を有して居たからで有ると見なされねばならぬ。

随所に似たような記述が見受けられるが、右に代表されるように茂睡は、堂上歌学を批判した「時勢の代表者・先導者」で「堂上歌学の破壊者」として認識されている。また中世歌学、いわゆる伝授思想に対しても、厳しい批判の眼を持つていたとされる。そしてそれは、契沖が歌論としてまとまつた著作を持たないのに比して、すこぶる具体で理論的であつたとする。この評価は広く学界に受け入れられたようで、倉野憲司氏「露寒軒が伊勢物語雑談」（『国語と国文学』九巻七号、一九三二年九月）には、

茂暉が中世に於ける堂上歌学排撃の先端となり、或は秘事口伝の因襲より脱し、或は制の詞の無稽を喝破し、或は感情に徹底すべきを説いて、和歌の解放を高唱したことは、既に一般に知られてゐるところである。

とあり、茂暉の評価は、佐佐木氏が論じたように定まっていたように見受けられる。

さらに付け加えるならば、『日本歌学大系』第七卷「寛文五年文詞」『梨本集』解題（一九四二年、風間書房）にも、

その契沖の主張が文献的研究の帰納による結論であつたとはいふ別にも、伝統歌学そのものの中にくひ入つて、所謂当然の理によつてこれを検討してその不合理性を鳴らしたのが、寛文五年三十七歳の時に記した宣言の文詞であり、契沖二十六歳、曼荼羅院時代のことで、その国学研究着手以前のことである。即ち堂上歌学攻撃の第一声であつたわけである。

とあり、先と同様、契沖を引き合いに出しつつも、契沖以前に茂暉が、「堂上歌学攻撃の第一声」をあげたとして高く評価されているのである。この評価はその後も大きく変わることなく、継承されていくようである。

歌論研究については、藤平春男氏¹⁾により深められたところはあるが、和歌史における評価は、大きく変わるものではなかった。『日本古典文学大辞典』（一九八四年、岩波書店）や『和歌大辞典』（一九八六年、明治書院）の「戸田 茂暉」の項目の執筆は藤平氏によるものだが、例えば、『和歌大辞典』では、

祖父も父母も和歌の素養があり、従兄には歌人山名玉山があつて、

伝統歌学の伝授も受けたが、寛文五年文詞をあらわして以来、制詞説否定を主とする伝統歌学批判に力を傾けた。

とされ、佐佐木氏の評価を受け継いでいる。その後も、例えば、『近世文学事典 新版』（二〇〇六年、おうふう、岡本聡氏執筆）の【概要】には、

歌人・歌学者。寛永六（宝永三・四・十四（一六二九〜一七〇六）。駿河国生。寛文五年（一六六五）、伝統歌学で重視されていた制詞を批判する「寛文五年文詞」を著し、元禄一（一六九八）には、『梨本集』でその主張をさらに具体的に論じている。（中略）茂暉は秘伝にも関心をもち、従兄の山名玉山から「つ、留」の伝受を受けており、その伝統歌学の知識を背景に堂上歌学を批判している。

とあり、やはり「堂上歌学を批判し」たとされている。続く【研究史・展望】には、

茂暉が影響を受けたと思われる従兄、山名玉山は清水宗川の弟子であり、この水戸家周辺の学問との関連の中で、戸田茂暉の歌学はとらえられるべきであり、今後の研究の進展が期待される。

と見え、「水戸家周辺の歌学との関連」という新たな視点が提供されたが、この提言に基づく、研究がなされているわけではない。揚げ足をとるわけではないが、この事典の旧版（一九八六年、桜楓社、小高道子氏執筆）もまた、「和歌革新に果たした役割の大きさを考える時、今後の活発な研究が期待される」と結ばれていたのであった。

個別の研究として『百人一首雑談』に焦点を当てた蔵中しのぶ氏は、『百人一首雑談』のよみくせ注記が『百人一首師説抄』に依拠してい

たことを具体に論じつつ、結論として、「茂睡のいわゆる「二条派歌学批判」の質はあらためて問い直されねばならないであろう」と述べる。けれども、その「質」が十分に検証されたとは言いがたく、同氏による「戸田茂睡―和歌革新の旗手³」では、出版社から与えられた題かもしれないけれども「和歌革新の旗手」とされ、茂睡の評価については、

茂睡七十歳の同十一年（一六九八）五月『梨本集』では長年あたためてきた制詞説批判を体系的に展開。（中略）伝統歌学の固定化した制詞説について、個別具体的にその根拠のないこと、事実

に反することを実証的に論じた。とあり、従来の見解を出るものではない。「茂睡を理解するための鍵は、かれのこの「伝統和歌」という概念そのもののなかにあるといえよう」と、この論は結ばれているが、茂睡がどのように「伝統和歌」を捉えていたのかは具体には論じられていない。

今挙げたものは、辞典（事典）の項目であったり、依頼されての論文であったりして、執筆者の意を十分に尽くしていない面もあろう。けれども、必ずと言ってよいほど使われる「堂上歌学の批判」と「和歌革新」は、茂睡を語るうえで欠かすことのできない最も重要なキーワードであることは確かであろう。

二、研究史への批判

小稿では、これら先行研究に指摘されていることのいちいちについて、新たに考証し、何かしらのことを付け加えたり、反論したりする

準備はない。それはそれとして、いったん認めたくうえで、けれども、そのことは前提とはしないで、茂睡の和歌史における位置について考えることにしたい。

そのために、まず、従来、顧みられることがなかったと言ってもよい小高敏郎氏の「和歌と歌学の場合―公軌、春正より茂睡、契沖まで⁴」という論文を確認することから、始めることにしたい。実は、この論文のなかで小高氏は、それまでの茂睡像に疑問を呈されているのである。にもかかわらず、事典類にもこの論文は、確認されることはなかった。また茂睡を取り上げたさまざまな論文にも引用されていない。この論文の見解が認められるものではないと積極的な意味において、無視されることになってしまったのか、単に看過⁵されてしまったのか、にわかには判断できないけれども、この論文が小高氏の著書『近世初期文壇の研究⁵』には取り込まれていないことや小高氏自身もその「あとがき」で別に論じたいとしていることから、小高論文は看過⁶ごされてしまった可能性が高い。また論文の本题には「茂睡」が含まれていないということも関係しているかもしれない。けれども、和歌史における茂睡の位置を考えると、この論文は看過⁷できるものではないと、稿者は考える。そこで、まずはその最も注目すべきところを、省略しつつではあるが、引用する。

小高氏は、『御当代記』に季吟のことを「俳諧師」と記していることをまず挙げ、

しかも季吟は歌学方として招かれたのである。俳諧師を幕府が召抱へる道理がないのも当時の常識である。それを取て歌学者と認めず、無学で卑俗な文芸を事とする「俳諧師」と注した茂睡の態

度には、季吟に対する妙な対抗意識が観て取れるのではないか。

(中略)

問題は貞徳や盤斎の歌学を認めず、彼を歌学者ではなく連歌師として侮蔑してゐることである。この季吟や貞徳、盤斎に対する罵言、侮蔑を単に茂睡の性格とばかりは受取れない。やはり其処に彼の党派の立場があつたと考へるべきではないか。

(中略)

かくその所説、学統より考へれば、やはり茂睡は貞徳一門に対して党派の意識を有してゐたと見たくなる。しかもそれは更に、歌学史における茂睡の占める位置に対しても関連してゐるのではないか。

(中略)

この推定の下に、再び茂睡の論を検討すると、革新的な歌論と通説では高く買つてゐるものが、実は前記の百人一首雑談の如く、特定の対象が意識されてゐた為の、偶然的結果と言ふべき場合が多いことに気づく。事実茂睡は秘伝も認めるし、二條家を始め堂上の説にそのまゝ従つてゐる場合も多いのである。従つて、彼の制禁の詞の打破に革新的な言説を認めるのはよいとしても、通説の如く近世歌学の先覚者などと高く評価したくない。

などと指摘された。「季吟に対する妙な対抗意識」や「貞徳一門に対して党派の意識を有してゐた」ということなどは、いまだ少し具体的に検討すべき必要があると思われ(このこと後述)、ここに述べられてゐることが、すべてにおいて直ちに認められるわけではない。しかし、茂睡の批判的言説が堂上ではなく、同じ地下歌人に向いてゐたこと、

そのことの「偶然的結果」が「革新的な言説」を産み出し、「近世歌学の先覚者」として評価されるに至つたとする点は、注意されるところである。

実は、このような見解に達していたのは、小高氏だけではなかつた。上野洋三氏は、「堂上と地下」のなかで「戸田茂睡の反抗?」という項目を立て、茂睡が、「堂上派の破壊」のためにひとり「獅子吼」したというように、文学史的には記述されるのが常である。」¹⁾としただえで、「堂上歌人の側にも同様の認識(制の詞に対する批判・西田注)は、常に存在した」と、その用例を挙げ、確認し、

茂睡の批判は、従つて堂上からすれば、何を当然のことを、今さら、と受けとるほかはなかつたであらうし、地下における争いごとと見ておくこともできたであらう。(中略)むしろ茂睡にも「伝授事」をことごとしく切り売りした形跡さえすでに確認されて居り、彼もまた当代に一般的な地下の指導者のひとりとして見る方が、事実に近いであらう。

と結論付けられた。
小高氏、上野氏の見解を承けているのかどうか、特に断られていないので、定かではないけれども、『歌論歌学集成 第十六卷』の『梨本集』を担当された鈴木淳氏は、その解題で、

その批判の対象は、当時、和歌に関して、絶対的な権威を振つてゐた堂上諸家に向けられていたとするのが、一般的な考えである。しかし、茂睡が直接、向き合つてゐたのは、堂上諸家というより、二条派の地下歌人の頑迷さではなかつたか。

とされ、その具体の標的を貞徳門弟で、水戸家周辺の歌壇で活躍した

清水宗川あたりではないかと推量されている。この点についても先の高論と同様、すぐにはその可否は判断できないが、従来「堂上批判」と言われてきたことに対して一考を迫るものであると言えよう。一方で、このような見解があるにも関わらず、先述したように、従来の「茂睡像」は継承されてきたように思われる。上野氏の言葉を借りれば、「茂睡ひとり荒野に獅子吼したかのごとき小説的記述」が蔓延っているということになろう。

小稿では、小高氏、上野氏、鈴木氏の驥尾に付して、新たに、同時代の地下歌人のふるまいという視角から、和歌史における茂睡の位置について改めて検討したいと思う。

三、『百人一首雑談』をめぐる

茂睡の歌人としてのふるまいを考察するために、『百人一首雑談』を対象とすることにした。

先に引いた小高論文では、季吟に対しての批判的な言説が結果的に堂上への批判へと見られたのではないかとされていた。例えば、『百人一首雑談』には、次のように、一見、季吟（『拾穂抄』）への批判めいた言説が見られる。

拾穂抄に「百敷やのやはすてやとて心なし。志賀の浦や、まつ鳥やの類なり」と云り。此説あまねく人のいふ事なり。総て拾穂抄は諸註又聞書などを集めて、その通りに書載たるまでにて、吟味してはか、ざるゆへ、拾穂抄の作者のあやまりにはあらざる也。右すてやといふに付て、呼出すやといふ事をいふ、かつらぎや、

小初瀬などを呼出すやと云、名所の名を云て、下にや文字を付たるに、かはりのある事をふしんさせて、そこで右の五文字にてよみたる歌を云て、秘伝秘説をさづけたりといはんため也。

（『百しきやふるき軒端の忍ぶにも』の注釈）

ここで述べられているのは、『拾穂抄』が諸注を集成しただけで季吟自身の吟味を経ていない、その注釈態度への批判である。「拾穂抄の作者のあやまりにはあらざる也」というのは痛烈な嫌味ではあろうが、むしろ、百人一首の「秘伝秘説をさづけた」とするところに批判の眼目はあろう。小高氏が説かれたほど、直接、季吟を批判する言説が窺えるわけではない。また小高氏は季吟のことをことさら「俳諧師」や「連歌師」と呼ぶところにも、批判の眼差しを認められたが、その点も、当時、そこまで意識的に「歌人」との違いを意識されていたのかは疑問である。

続いて具体の注釈のありようを探るために「おく山に紅葉ふみわけなく鹿の」の歌の注釈を見てみたい。『百人一首雑談』では次のように注釈されている。

おく山と云五文字肝心なり。きく時ぞのぞの字、秋はかなしきののはの字、まなこの字也。一説に「紅葉ふみわけと句を切て、なく鹿の声きく時と読べし、是は問答の歌也。秋はいつがかなしきと問れて答たる歌也」と云、此説も不可然。又紅葉ふみわけといふは、鹿にかぎらず、わが紅葉をふみ分て、なく鹿の声をききたる心もあり。又云「人のうへにも、始なれちかつかぬ間はおくゆかしく覚れど、馴ればさもなくとましきもの也。おく山の紅葉も詠めあかぬこずゑながら、散行ころなれば鹿の声のあはれに

おもしろがりつるも悲しき事に成」などといふ事、一向に用ざる事也。かやうの事が今時の口尺なり。替りたる事をいはんとて、こゝろをいろく〜に面白つけて云て、本心をうしなふと云也。歌のこゝろは、秋は萬物零落の時也。里にありても物がなしきに、殊更おく山の紅葉散頃のさびしさあはれさ、こゝろのうちのかなしさ、中々言葉にのべつくしがたかるべし。その折節鹿の聲を聞たる、いか計のこゝろなるべし。秋はとしかと云て、〔補注〕(省略)かなしきといへる眼の字といへる、尤の事也。秋はなに事もよけれども、鹿の聲さく時ぞ秋はかなしきといふはの字にはなき也。おく山のさびしさかなしき、紅葉散風の音、すべて時に応じてのあはれさ様々なれども、此山のみの秋ならねば、ながめ捨て出べき事にもあらず、猶堪るこゝろある頃、なく鹿の聲聞時ぞ也。此ぞの字又眼字也。秋はかなしきと云心也。か様に聞て感情あさからず、こゝろにおもひこむるは、歌学得たる人なるべし。こゝろに徹しておもしろからずば、歌学まだしきゆへと心得、猶学ぶべしと云り。ある註に、花は端山より咲て次第に山ふ

かく咲《この事大僧正行尊の歌の所にて出あふべし》、紅葉はおく山より散て端山はをそし《家隆の、下紅葉かつ散山の歌にて出あふべし》。 ※《 》は割注

順に確認してゆけば、最初の「おく山と云五文字肝心なり。きく時ぞのぞの字、秋はかなしきのはの字、まなこの字也」というのは、茂睡の説で、そのすぐ後の「一説」から「悲しき事に成」までは、「今時の口尺」であって、「替りたる事をいはんとて、こゝろをいろいろに面白つけて云て、本心をうしなふ」解釈であると批判される。その後

に改めて茂睡自身の解釈が示されることになるが、まずは、この批判された説について検討しておこう。結論を先取りして言えば、「不可然」とされた説と「一向に用ざる事」とされた説は、ともに『百人一首師説抄』の説くところとほぼ一致している。

又裏の説、人の上にも始なれ近づかぬ間は床敷覚ゆれど、馴れゆけばさもなくうとましくなりなむとする心を籠めたり。扱秘説と言は、ふみ分と句を切みる也。この心は我紅葉をふみ分又鳴鹿の声を聞時分が秋が別て悲きと也。但現在紅葉を踏分、現在に鹿の声を聞には不限也。猶秋はいつが悲しきと問れて答る様の心は前の説に同じ。時と言字せむ也。問人に不可限世界の秋也とおしひろげて、ふり行時節の変化を感じて悲むと也。

右に示したように、批判された注釈の順序は入れ替わっているけれども、「人の上にも始なれ近づかぬ間は床敷覚ゆれど、馴れゆけばさもなくうとましくなりなむ」や「秋はいつが悲しきと問れて答る」など、その文言の一致から見て『百人一首師説抄』が批判されているとみて間違いないだろう。

先にも引いたように蔵中氏は茂睡の『百人一首雑談』の作者名よみくせ注記が、『百人一首師説抄』の影響を受けていることを指摘されているが、右に見るように、影響を受けているばかりではなく、批判もしているということになる。この『百人一首師説抄』の著者であるされる祐海法師は、『師説抄』に書き入れをしている伊藤栄治と関係があり、伊藤栄治は貞徳門ではないかとも推定されている。また『師説抄』には北条氏朝による写本が存在する。氏朝もまた貞徳門であった。以上のことを考慮するならば、貞徳門の注釈を、茂睡は一方では利用

し、一方では批判するという、是々非々の巧みな利用をしていたことになる。

また二つの説の間に挟まれた「又紅葉ふみわけてといふは、鹿にかざらず、わが紅葉をふみ分て、なく鹿の声をききたる心もあり」というのが、これも先行する注釈を批判しているのか、自説を述べているのかはつきりしないところがあるが、紅葉を踏み分けたのが「鹿」か「我（人）」かということは、例えば、契沖の『百人一首改観抄』¹³が、

（前略）奥山とは鹿のすむ所なり。（万葉引用省略）もみち踏分とは、ふたつの心有べし。常は鹿のふみ分ると心得来たり。菅家の此歌に付ての御詩に（引用省略）、此第三句に「勝地尋来」といふによらば人のふみ分るにや。いづれにてもかなふべし。

と説くところでもあった。

では次に批判の後に展開された茂暉説について、検討を加えよう。ここで説かれるのは、まさに冒頭の一文で述べたことの詳細な解説ということになる。冒頭で説いた「きく時ぞのぞの字、秋はかなしきのほの字」のそれぞれの「ぞ」と「は」がこの一首の眼目の文字であること、また秋という季節は、

里にありても物がなしきに、殊更おく山の紅葉散頃のさびしさあはれさ、ころのうちのかなしき、中々言葉にのべつくしがたかるべし。その折節鹿の聲を聞たる、いか計のこゝろなるべし。

と「鹿の声」を聴くときにそれが強調されることを確認するのである。そして改めて「此ぞの字又眼字也。秋はかなしきと云心也。か様に聞て感情あさからず」と述べる。藤平氏が説かれた茂暉の歌論が反映さ

れている説であるけれども、例えば、茂暉が批判対象としても取り上げていた『百人一首拾穂抄』¹⁴にも、

（前略）歌心は明なり。師説秋はなべて物がなしき時節にいひならはせり。誠に春の空のはなやかなるとはかはりて物侘しく悲しき也。されば奥山に紅葉も散たる比、鹿の打侘て啼たるを聞きたる当意、忽秋の感情おこりて読るうた也。かやうに心得て歌をみれば、時ぞの字、秋はの字、気味ふかく面白し。心をつくべし。此紅葉ふみ分など云詞、風情たぐひなきものなり。（以下略）

とあり、「忽秋の感情おこりて読るうた也。かやうに心得て歌をみれば、時ぞの字、秋はの字、気味ふかく面白し」という物言いなど、すこぶる似た説が展開されている。ここは、「師説」として引かれているので、貞徳の説ということになるかもしれない。例えば、成立は、『百人一首雑談』よりも遅れるけれども、門弟に相伝され、貞徳の説を直接反映していると思われる『百人一首秘訣』¹⁵を見てみれば、

本抄頭書に委。一天世界の秋の悲しさを「ぞ」の一字にこめたる妙也。感情至極の哥也。哥は感を以て正意とする習ある也。（中略）此哥觀念の哥也。古より月やあらぬ程の哥と云々。「時ぞ」の「ぞ」の字此哥の眼目也。（中略）比はいつばかりととへば、八月下旬ばかりのこと也。古今集秋上の末に入れば、暮秋のことにはあらず。九月の比はかなしきも過て、最早すさまじくなる物なり。かなしきと云時分は、八月下旬ばかり也。森羅万象を「時ぞ」の一字にこめられたる、是粉骨也。心をつけてみるべし。其感尤深し。

（以下、『史記』の引用略す）とあり、同じような物言いが窺えるのである。

たまたま見解が一致した可能性は否定できないけれども、茂睡が『百人一首拾穂抄』を見ていたことは、明記して引用することもあることから明らかなことである。ここでも季吟（あるいは貞徳やその門弟）を批判ばかりしていたわけではなく、採るものは採り、批判するものは批判するという、先の『百人一首師説抄』の利用にも通じる茂睡の是々非々の姿勢が見て取れるのである。

このような『百人一首拾穂抄』や『百人一首秘註』との見解の一致を思い合わせるならば、むしろ、「名にしおは、あふさか山のさねかづら」の注釈に見られる

又説「二條家の本になにのこ、ろおぼえにや、此ての字に丸を付て置たるを見て、扱はずみて心うる事とおもひたる」など云り。然れば相伝もなく歌の心得もなき人の、かはりたる事云をば用ゆべき事にあらず。

とある「相伝もなく歌の心得もなき人」への批判は、次に挙げる貞徳の

「和歌無師匠」とあれば、師伝といふ事有まじきと思ふ人あり。それはおろかなる事なり。（中略）和歌に師匠はあれども、ことみちに替りて、師匠いらざる理あるによりて、師匠なしとは云へり。此正儀はおぼろげの人には伝ふべからずと云々。師伝なき人の歌書をよむをきけば、清濁をも弁ず、句切をも知ず、假名字をいはると云事をも嫌はず、つむる所もつめず、はぬる所もはねず。口中の大事をしらざれば、開合をも知らず。かたはらいいたき事也。

（『戴恩記』（日本古典文学大系、岩波書店）に影響されたのではなかつたかと思われもするのである。少なくとも

同様の見解であることは確かであろう。貞徳も茂睡も相伝・伝授という営為そのものを無下に攻撃し、否定しているわけではない。むしろそのようなあり方は大切だと考えていると言つてもよい。では「伝授」の何が問題で、何が批判されているのであろうか。例えば次の「有明のつれなくみえし別より」の注釈を見られたい。

此段秘説なり。（中略）又歌のこ、ろ中々ふかく、その一つの題に落しつけてきくべき歌にてなきには、題しらずと書事也、是秘事なり。（中略）歌のをしへに沈思すべしと云事、歌をふかく案ずる事と皆人思へり。尤歌を案ずる事にして、心もちは各別のおしへあり。此歌の秘伝といふは、此歌につるて右の沈思の事、又無題の事いひきかする事あり。か様の事を聞て心によくおさめ心得待れば、歌のがつてん行てよまる、事也。是によつて秘説口訣相伝とは云とぞ。今程秘説相伝など云は、たとへば拾遺集はいかのうち、尋常珍重と書、このよみやう口伝秘事など云、又都鳥と云鳥の事、源氏の三ヶ条又は徒然草にも、布の帽額しろうるりなどの事をいふ、き、てそのものの事也としりたるまでにて、その余情を以て、こ、ろのはたらく事にもならざれば、人のしらぬ事々をき、たるといふまでにて、なにのたりにもなる事にあらず、総て今程しれぬ事どもに、品をつけてその事を云て秘事也といへり。まことにその事にきはまり、代々相伝し来るもしらず、又我が利口を以て相伝と云事やらん。又先人の利口をもつて云出したる事をき、て、それを秘伝といふもしらぬ事、とにかくその一品にきまりて、他のちからにもならぬ事は、秘事相伝とはいふべからず。（以下略）

「此段秘説なり」と始まるように、茂睡自身がこの注釈を「秘説」としているわけである。そして、自らが説く「秘説」と世間一般に説かれていた「秘事相伝」というものの何が違うのかを丁寧^①に説明する。批判対象として挙げられる『徒然草』の秘伝などは、貞徳が関わった可能性もあり、ここではそれが直接批判されているけれども、結局、問題となるのは、秘事を単なる知識として知っているだけでは、「その余情を以て、こゝろのはたらく事にもならざれば、人のしらぬ事々をき、たるといふまでにて、なにのたりにも」ならないことであろう。「伝授」という営為を否定するのではなく、その内容を問題にしているという点において、貞徳との考え方と大きく変わるものではない。先にも確認した通りである。

すでに事典類にも記されていたことだが、想い起こせば、茂睡にも、『古今集三木三鳥大事』などの秘伝書があった。これらに取り上げられていないことを付け加えておこう。日下幸男氏の著書に以下の記事が確認される。

元禄八年五月、山崎光隆に茂睡は「八雲神詠伝」を付与する。飯田図書館堀文庫本は転写本。茂睡奥書に、

露底軒入道
梨本隠家茂睡判
元禄八年乙亥年中夏日

隠居後改二五齋
山崎平右衛門／光隆

原本未調査のためこれ以上の情報は今のところ不明であるが、『八雲神詠伝』は、貞徳門弟において相伝されてきた秘伝書である。この書を茂睡は誰から伝授されたのかは不明であるが、ここでもまた貞徳門

弟との接点が窺えるのである。

もはや茂睡のあずかり知らぬことであつたかもしれないが、『百人一首雑談』の明和四年の「道遠」による書写奥書には、

百人一首雑談集写本上下二巻、歌道の口伝秘説多此書にあり。血判の神文を以、師伝の外、他見をゆるさざるよし、原本の巻末に書しるしあり。予うとからぬ人の家に其書をひめをかれしを、いたくこひもとめてうつしをきぬ。

とあり、茂睡門弟には、この書が言わば秘伝書として相伝されていたことが確認される。結果的にということになるかもしれないが、茂睡もまた、伝授とは無関係ではおれなかつたのである。

四、まとめ

戸田茂睡は革新的な歌人としての面ばかりが強調され過ぎてきたように思われる。確かに伝統的な歌学から脱却しようとし、批判的な物言いもしていたであろう。その批判は指摘されているように季吟や宗川など貞徳門に向けられていることもあつたであろう。あるいは堂上歌人を対象とすることもあつたかもしれない。しかし、それはそれぞれの説に対する是々非々の判断の結果であつたともいえるのではないだろうか。この是々非々の態度、悪くいえば、優柔不断とも言いうる態度は、広く地下歌人の特徴的なふるまいとして認められるのである。そしてそれは、貞徳言うところの「古今伝授の人」ではない故に持ちえた自由さでもあつた。このように、松永貞徳には「古今伝授」に対し、冷静な物言いが窺われるし、伝授に対して、埒外にいた

と思われる契沖にも、「六条家古今和歌集伝授」という伝授書に名を連ね、伝授に関わった形跡が認められるのである^①。

私どもは、つい、伝授を批判するものは、自らは伝授には関わらないと考えがちだが、おそらく当時の少なくとも地下歌人たちはそうではなかったであろう。伝授も日常にあり、そしてその批判や秘伝の公開（出版）も日常にある、地続きの営みであったのであろう。伝授を批判しつつ、秘伝的なものを墨守すること、その一方で学問を公開することは、決して矛盾する営みではなかったのである。

茂暉の制詞への批判は確かに革新的なものであったかもしれない。しかし、直接にそのことを批判しなくても、例えば、貞徳は、万葉語や連歌語を取り込み、積極的に歌語を拡大することを考えていたわけ、表れは異なるけれども、目指している方向に大きな違いはなかったとみてよい。それぞれがそれぞれの方法で堂上を中心とする歌壇とは異なる方向を目指していたのである。ひとたび、和歌史のなかに茂暉をおいて、虚心に眺めてみるならば、貞徳門弟の地下歌人たちと似たようなふるまいをしていたわけで、同時代に生きた地下歌人の典型であると言えないにしても、そのふるまいは地下歌人たちの最大公約数的な枠組みを大きく逸脱するものではなかったのである。

小稿は、依頼のあった『和歌文学大辞典』（二〇一四年、古典ライブラリー）の項目（戸田茂暉）に、従来の茂暉像とはいささか異なることを記した、その背景を述べたものである。この項目の記述に対し不審に思われる方もありやという思いから執筆した。本来であれば、いま少し考察を深めてから発表すべきであったかもしれないが、すでに辞典が刊行されてからも随分経ち、ひとまずは、補足的な意味でこ

の小稿を執筆することにしたのである。十分に論じ切れていないところは今後の課題としたい。

【注】

- (1) 『藤平春男著作集』第四卷（一九九九年五月、笠間書院）。所収論文の初出はそれぞれ、『国文学研究』（一九五一年）『和歌文学研究』（一九五六年）である。
- (2) 「戸田茂暉『百人一首雑談』の作者名よみくせ注記」 积祐海『百人一首師説抄』との影響関係を中心に」（大東文化大学『日本文学研究』29、一九九〇年二月）
- (3) 『解釈と鑑賞 特集 近世の歌人たち』（一九九六年三月、至文堂）
- (4) 『國語と國文学』三一巻四号（一九五四年四月、至文堂）。引用は新字体に改めた。
- (5) 『近世初期文壇の研究』（一九六四年十一月、明治書院）
- (6) 島津忠夫氏他著『和歌史―万葉から現代短歌まで―』（一九八五年四月、和泉書院）
- (7) 『歌論歌学集 第十六卷』（二〇〇四年十二月、三弥井書店）
- (8) 元禄五（一六九二）年成立。以下、引用は『戸田茂暉全集』（一九一五年、国書刊行会）による。表記は適宜改めた場合がある。
- (9) 以下、堂上歌人による注釈にも同様の見解が窺えるものもあるが、今回の検討では、地下歌人による注釈との比較を中心とする。

- (10) 明暦四(一六五八)年成立。引用は、泉紀子・乾安代編『百人一首注釈書叢刊5 百人一首師説抄』(一九九三年二月、和泉書院)による。表記は私意により改めた場合がある。
- (11) 川平敏文氏『徒然草の十七世紀』IV・1伊藤栄治(二〇一五年二月、岩波書店)。前掲の泉紀子・乾安代編『百人一首古注釈叢刊5 百人一首師説抄』の解題では十分ではなかった点を明らかにされた。
- (12) 日下幸男氏『近世古今伝授史の研究 地下篇』(一九九八年十月、新典社)
- (13) 元禄五(一六九二)年成立。引用は、鈴木健一・鈴木淳編『百人一首注釈書叢刊10 百人一首三奥抄・百人一首改観抄』(一九九五年八月、和泉書院)による。表記は私意により改めた場合がある。
- (14) 天和元(一六八一)年成立。引用は、大坪利絹編『百人一首注釈書叢刊9 百人一首拾穂抄』(一九九五年、和泉書院)による。表記は私意により改めた場合がある。
- (15) 宝永元(一七〇四)年成立。引用は、大坪利絹氏の翻刻(『親和国文』二七号(一九九二年十二月)による。表記は私意により改めた場合がある。
- (16) 前掲、日下幸男氏『近世古今伝授史の研究 地下篇』(一九九八年十月、新典社)による。
- (17) 拙著『松永貞徳と門流の学芸の研究』(二〇〇六年二月、汲古書院)参照。

(にしだ まさひろ・大阪公立大学国際基幹教育機構教授)